

## 図書館長の橋本健吉は 詩人 北園克衛だった



かつて日本歯科大学は、医学系なのに、芸術の香り高い大学と噂された。それは紛れもなく、洋画家の中原 實 と詩人の北園克衛がいたからである。

富士見町のごびた校内を、こげ茶のブレザーに茶のベレー帽をかぶって、せっかちに歩くダンディな人物がいた。場違いではないが、太縁の眼鏡にギョロ目を光らせ、苦虫をかみつぶして、誰も寄せつけない気難しさがあった。

学内には、彼、橋本健吉を北園克衛と知る者は、ほとんどいなかった。中原学長と妙に親しい無愛想な人、という認識しかない。

北園克衛（きたその かつえ）は、大正期に始まった新興芸術運動に触発され、言葉をオブジェのようにちりばめる独自のモダニズム詩作を編みだす。その延長線上に、プラスチックポエムといわれた写真デザインを展開した。彼の詩業は、前衛詩、造型詩という斬新なフィールドを開拓する。昭和4年に処女詩集『白のアルバム』を発表し、従来の詩の概念をくつがえして、詩壇に衝撃をあたえる。

彼は、中原 實 が大正15年に結成した新アバン

ギャルド集団「単位三科」に参加した。絵画とポエムという異質のジャンルながら、彼らは、たがいの芸術表現に魅せられて親交を深める。

北園は昭和5年、雑誌『アトリエ』に「星のピラミッド」と題して、長文の中原 實 讃歌を謳う。その一節を記す。

「一九三〇年の貴下らは、現在いま Surréaliste 中原 實 の繪畫を見たか。一九三〇年の中原 實 の容貌を見たか？ しかる後に一九三〇年の繪畫 La Peinture に就て語れ。」

一方、中原は、8歳下の北園を“北原白秋以来の天才”と礼賛する。昭和9年には、本学附属病院の落成祝賀式のあと、工事の陣頭指揮をとった彼は、北園に心中を吐露する手紙を送った。

「心友よ。

詩集は受取った。有難う。建築は出来上がった。

七月一日二日落成の祝賀があった。

君も居ればよかったと思った。

建物はスバラシイ。

僕はこのために、随分エネルギーを費消した。

全く歳らしい白髪を混えた。

だが、何もむくひられる所はなかった。

凡ての事業が虚偽の集積であることを、はっきり知ることが出来た。

個人の芸術だけが、幾分完全な（論理的に）人生と云へると思ふ。」

当時、北園は妻帯し一児をもうけたが、久しく定職がなかった。そこで、彼は中原に誘われて、昭和10年（1935）4月、34歳にして日本歯科医学専門学校の図書館長に就く。まともな食い扶持をえて、その7月には芸術家集団VOUクラブを結成し、前衛詩人北園克衛の顔となる機関誌「VOU」を創刊する。このローマ字には、とくに意味はない。

学内では周知されていたが、橋本図書館長は、司書の女性連といざこざが絶えなかった。やむなく中原が助け舟をだして、昭和36年に企画部長を併任させて、図書館とはなれた企画部室に席をおかせた。私は学生時代、北園が前衛ポエムの教祖といわれる高名な詩人とは知らなかった。昭和40年に助手・主事補として就職し、本館2階の階段側の室に入った。その上の3階に企画部室があった。

その企画部にいくと、大きな雑誌の書架に、華やかな詩誌「VOU」の既刊号が、麗々しく並べられていた。彼のかたわらには秘書の杉山久子が付きそって、学内ニュースの編集を主な仕事とした。橋本は、たいてい昼すぎには足どり軽く本業（？）に出かけていく。まことに、ひとり誰にも束縛されない自由な身分であった。詩には興味がなかった私は内心、勝手気ままにやっているなあ、と苦々しくみていた。

そう思いながらも私は図々しく、昭和46年に医歯薬出版からだす『歯科概論』の、表紙のデザインをお願いした。数日して橋本は、2枚のデザイン画を私のまえに並べた。実はシャイなのだが、ぶっきらぼうな喉声で、「どっちかだよ。あとは画かないよ」と念押しされた。試されていると思いながら、迷わず私は、子供が悪戯したような渦巻きの線描画を選んだ。もう1枚は、真ん中に黒い四角の箱を画いた図案だった。彼は無言のまま、素気なくそれを持ちかえった。

北園にとって「VOU」は、詩の実験室であり詩人の孵卵器であった。国際感覚するどい彼は、

「VOU」をつうじて欧米へ精力的にネットワークをひろげていく。その実験的な多発なモダニズムは、国内に先んじて、海外において前衛詩と造型詩の評価を高めた。

北園の熱烈な研究者ハーバート大学のジョン・ソルトは、10年余り日本に滞在して北園の資料を渉猟した。私は、本館横のレストランで彼の取材に応じた。大学での橋本しか知らないで、「管理職としては、落第でしたよ」と彼の一面を率直に伝えた。

そのあと、中原 實 が北園の大パトロンであった、と強調した。詩で食える者はいないから、みな不本意な生業（なりわい）にあくせくする。けれども、北園は中原の絶大な庇護のもとに、悠々と詩業に時間を費やすことができた。もちろん“心友”同士、彼らには優越的なパトロンという意識はなかったろう。実に、そういう最高の理解者である後援者こそ、ほんとうのパトロンというのだ。

昭和53年（1978）6月6日に77歳で亡くなるまで、橋本健吉は本学に43年間在職した（当時、本学には定年がなかった）。その間、彼は24冊の詩集を残し、その死とともに「VOU」は160号で終刊した……。こんな幸せな詩人は、何処にもいないだろう。

昭和45年のある日、突然ドアがバタンとひらくなり、橋本が恐い顔で疝高い声を張りあげた。「勲章の申請など、してくれるなよ！」思わず直立して私は、「ハイ、分かっています」と答えた。当時、本学では70歳になると叙勲の申請手続きをしていたが、余計なことはするなと言うのだ。私が従順だったので、橋本は形相をやわらげてテレ笑いした。

当時、中原や北園たち新鋭の芸術家は、国家に優遇される芸術院会員や官邸の御用絵描きの類を軽侮し、そのスノビズム（俗物根性）を嗤（わら）っていた。彼らにとっては、自らの創作表現がすべてであり、芸術に権威づけなど無用であったのだ。

私は、物書きの端くれだったので、橋本の一喝には共感するものがあつた。

（写真：昭和52年、企画部室で、杉山久子さん、橋本健吉氏。逝去する前年の、北園克衛の知られざる貴重な資料である）